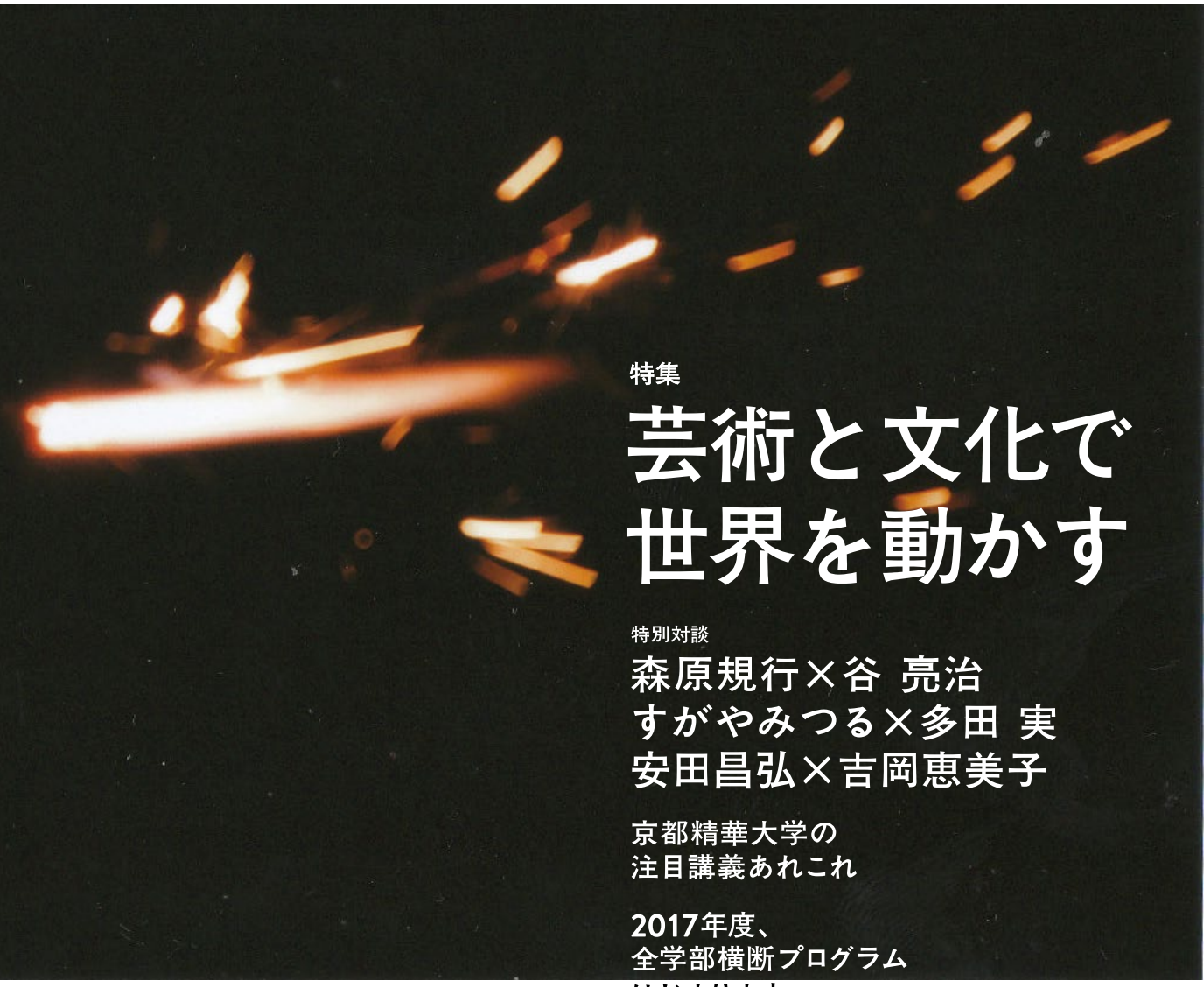
京都精華大学 広報誌

木野通信

KINO PRESS.
KYOTO SEIKA UNIVERSITY
issue 68



特集

芸術と文化で世界を動かす

特別対談

森原規行×谷 亮治
すがやみつる×多田 実
安田昌弘×吉岡恵美子

京都精華大学の
注目講義あれこれ

2017年度、
全学部横断プログラム
はじまります。

NEWS&Topics

岡本清一記念講座第9回「日本と世界を考える」
山本義隆講演会
近代日本と自由 −科学と戦争をめぐって−

CONTENTS

特集
芸術と文化で世界を動かす

4 特別対談
森原規行×谷 亮治
すがやみつる×多田 実
安田昌弘×吉岡恵美子

10 京都精華大学の注目講義あれこれ

12 2017年度、全学部横断プログラムはじまります。

14 京都市左京区にオープン 開かれたアトリエ THE SITE

16 社会人講座 ただいま開講中

NEWS & Topics
18 大学ニュース
21 岡本清一記念講座第9回「日本と世界を考える」山本義隆講演会 近代日本と自由 ―科学と戦争をめぐって―

精華生たちの今
22 活躍する卒業生
23 歩みはじめた在学生

表紙撮影：
石田小榛
（芸術学部版画コース3年）

KINO PRESS.
KYOTO
SEIKA
UNIVERSITY
issue
68

多様な「学び」と「交流」を

学長 竹宮惠子
（マンガ学部ストーリーマンガコース教員／マンガ家）

大学改革に取り組みはじめて2年余り、改革の中心に据えた新カリキュラムの始動がいよいよ目前に迫ってきました。本学ではこれまで、各学部における専門教育に磨きをかけ、一定の成果を挙げてきましたが、その反面、学生の視野が狭まりやすいという課題を抱えていました。たとえば、ストーリーマンガを描くための画力や構成力を鍛えても、実際に描く際には専門外の「雑学」が要求されます。歴史マンガを描こうにも歴史に関する知識がないと、背景を描くことさえままなりません。ですから、専門分野以外のいろいろなことに興味をもち、さまざまな知識や教養、あるいは社会で活かすための応用力を、学生のうちにたっぷりと身につけてほしい。今回新たに導入した「教養教育」と「副専攻」の全学プログラムには、そうした願いが込められています。

また、授業における学びもさることながら、学部の垣根を超えた学生同士の交流によっても個々の視野が広がるのではないかと期待しています。他学部の学生同士、互いの相違点を発見し、そこから個々の表現の幅が広がったり、コラボレーションに発展したりと、何かおもしろいコトが起きる予感がするのです。

そうした交流によるプラス作用は、今春開設予定の国際学生寮でもきっと起こるはず。言葉や習慣、物事の捉え方など、さまざまな違いをもつ日本人学生と外国人留学生が生活をともにするわけですから、はじめは戸惑うことも多々あると思いますが、やがて相手の国の言葉や文化に興味をもち、新しい扉を開く楽しみへと変化していくことでしょう。

新カリキュラムや新たな施設における多様な学びと交流が、本学をどのように変えていくのか。期待と不安に胸を高鳴らせつつ、節目の春を迎えることになりそうです。

特集

芸術と文化で世界を動かす

当たり前のことが当たり前じゃなくなる時代、きっと、芸術と文化、思考力と創造力をあわせもつことが既存の枠組みを変えてしまうだけの原動力を生み出すに違いない。今回の特集は、異なる分野で活躍する方々の対談を通して領域横断の可能性を探ります。

「まちづくり」とデザイン。それぞれを専門とする2人が、まちづくりと大学それぞれの現場での経験や、これからの協働の可能性について話し合いました。

「組み合わせ」の可能性

森原　芸術大学の学生は、つい作りたいものを基準にして、手から考えはじめてしまう。僕なんかもそういうところがあるんですけど。その前の段階、問題を見出すところで、谷先生といっしょにできることがあるんじゃないかと思っていたんです。

谷　実は、まちづくりの現場でも似たような状況でして、まちづくりに関わる市民を増やそうと思うと、まずは自分事になっている関心や「この問題は放っておけない」ということからはじまるので、そういう意味では、作家さんとの違いはないんです。ところが、本人がやりたいということと周りが求めているものが必ずしも一致するわけではない。結果的に求められていない活動を量産してしまっているとすれば、我々まちづくりの援助者というのもなかなか罪つくりな存在ですよね。まちづくりに参加したいという意志は否定したくないので、難しいところなんですが…。

森原　僕らの現場と同じような課題を抱えておられるんですね。僕がゼミで試みていることをひとつお話しすると、自分が「今だな」「新しい兆しを感じるな」というものをたくさん写真に撮ってきてもらうということをしています。すると、目線は人それぞれなんだけど、どこかで共通項を見出せたり、写ってるものは違っていても、実は同じ問題意識を共有していることに気づくことができる。僕らの場合はやっぱり、言葉の空中戦よりも、ビジュアルで物事を共有することで話が早くなるんです。

谷　まさに、そういった手法がもっと開発されていかなければいけないと思いますね。いかに自分のやりたいことと世の中で求められていることを結びつけていけるかどうか。僕は、まちづくりの研究を続けるなかで、「コミュニティ」という言葉の使われ方にとても疑問をもっていましたが、今のところ、「コミュニティ」というのは「組み合わせから価値を生み出す機能」のことをいうんだろうと考えています。決して集団が大事なのではなく、集団に属することで自分が求める資源との組み合わせがやりやすくなる。つまり、重要なのは組み合わせを促す機能なんですね。たとえば、芸術大学の学生がもっている技術ややりたい思いと、地域の課題が組み合わされば、これに勝るものはない。だけど、たぶん今、そのためのコミュニティが足りていないんですね。みんながみんな高度に分業することで便利になった面もあるけど、その間をつなぐコミュニティが弱いんだろうなと感じています。

森原　本当にそうですね。そこで最近、僕が学生に伝えているのは、「モジュール」として考えようということ。インプットの強い学生、アウトプットの強い学生…それぞれがひとつのモジュールとして組み合わさることで、ひとりでは決してできない新しいものが生まれるんじゃないかと。

かっこいい背中は街にあり

谷　なるほど。ぜひ失敗を恐れないで、変だと思えるような組み合わせにも挑戦していただきたいですね。いろんな組み合わせを試すことが大事なのに、失敗するとだめだという風潮にみんなが怯えてるような印象があって…。

森原　本校に入学してくる学生たちにも、つい正解や成功を出そうとするところがあるので、「それは違うよ」って言ってます。とにかくたくさん失敗をして、世の中に出たときに同じ失敗を繰り返さなければいいわけで、大学時代は失敗を許される4年間だと思うんです。

谷　実際に暮らしている住民さんだと生活の切実さがあるので、なかなか気軽には失敗できない部分がありますけど、学生や僕らがいい具合に失敗をして、それを許容できる土壌を作ることも大事かもしれませんね。第三者が地域に関わることってそういう意味がある。

森原　そうなんです。学生のバイタリティというのはすごいものがあるので、僕らは、失敗を恐れないように後ろから押してあげればいいだけなのかなと思います。だけど、かっこいい背中を見せる大人や先輩が少なくなっている気がしませんか？ あまり昔話をすると気持ち悪がられるんですけど（笑）、僕が学生の頃はかっこいい先輩に憧れて、ちょっと悪さをしてみるみたいなことがありました。先輩が持ってるジッポーに憧れるとか。そういう機会が今の学生には足りなくなっているのかな。

谷　地域ほど、多様な背中を見る機会に恵まれた場所はないかもしれません。僕も学生の頃、「もっと勉強してこい」って地域に放りこまれてきましたが、そのときにすごくお世話になった当時の副会長さんがいました。でもその副会長さんの上に、アイデアマンで経験豊かな会長さんがいらっしゃって、副会長さんがいろいろ新しいことをやろうとすると怒られるわけです、「そんなんじゃダメだ!!」って。大学生だった僕は、なにかにつけ怒られないことを第一に考えてしまいがちだったのですが、副会長さんは「谷くんな、そんなん1回怒られといたらしまいや」と言うわけです。何度か怒られながらも提案を続けることで、最後には「まあいいよ」って話になっていくんだと。それがすごくかっこいいというか、自由になれたと思った覚えがあって、その副会長さんの言葉は、僕の中でもすごく大事なものになっています

「おしゃれ」だってまちづくり

森原　それはいい話ですね。学生が地域に入ること、地域が学生を求めること、その相互のモチベーションにもつながるようなことがとても大事なんでしょうね。

谷　地域の方にとって、学生の面倒を見るっていうだけでも、大きなモチベーションを生んでいるという話で、そういう意味では、それぞれができることを活かすということも大事なんですけど、もっと単純に、堂々と地域に関わってほしいなと思いますね。学生さんには特にそう思います。よく僕がたとえ話として話すのは、若い女性がおしゃれをして、笑顔で街を颯爽と歩くこと。これだって十分、街の風景をつくることに貢献しているはずなんです。実際、お店のことを思えば、すてきなお客さんが来ることがその店のステイタスになるわけだから、それは街であっても変わらない。そういった日常的で、小さくて目立たないけどなされている「まちづくり」って結構、あると思うんです。

森原　それはいいことを教えていただきました。僕らが学生と「まちづくり」に関わろうとすると、つい何かお祭りやハレの日を立ち上げようとばかりしてしまう。実際、お祭りをオチにしている物事ってあふれていますよね。だけど、「ケ」の部分というのか、日常のなかでやることも大事なんですね。

谷　そこがくやしいところで、お祭りを立ち上げる方が出世するんですよ（笑）。報告書の見映えもいいですし。だけど、僕は、お祭りももちろん大事なんだけど、それをつくっていくための過程、その厚みを大事にしたい。芸術ってきっと、そういうものに目を向ける視点があると思うんですよ。世の中が祭りに目を奪われてしまっているところで、こっちの日常にも価値があるぞって訴えてほしい。精華大で学ぶ学生にはそんな期待をしています。

森原　少し前までは、僕も「まちづくり」に対して、やや真面目すぎるような印象をもっていたんですけど、谷先生とお会いしたりするなかで、「まちづくり」に対するイメージがどんどん明るいものに変わってきました。ただ、現場はまだそうでもないのかもしれない。きっと、そこにもデザインが果たせる役割がありそうですね。

谷　おっしゃるとおりだと思います。「議題解決型」と「未来展望型」というふたつがあって、単純に言い直せば「やらなきゃヤバい」のか「やったら楽しい」のか。現実を認知する方法次第でモチベーションは随分変わってきますよね。そこは、僕らがごりごり調査をして、データで示すという今までのやり方だけでは、見せるという部分で足りていない。そんなところでも、ぜひデザインの力をお借りしたいですね。

地域の方にとって、学生の面倒を見るって本来、楽しいことだと思うんですよ。

谷 亮治

ソーシャルデザイン

谷亮治
1980年生まれ。社会学者、京都市まちづくりアドバイザー。専門は住民参加のまちづくり論、コミュニティ論。著書に『モテるまちづくり　まちづくりに疲れた人へ』。京都精華大学にて始動する新カリキュラムにおいて副専攻講師としての就任が決定している。

地域と学生、相互のモチベーションにつながるようなことがとても大事なんでしょうね。

森原規行

ビジュアルコミュニケーション

森原規行
京都精華大学デザイン学部 デジタルクリエイションコース教員。2020年の京都を想像し、未来のコミュニケーションを企業や行政と共創する「セイカ未来プロジェクト」を学生たちと運営している。

◉6人の似顔絵イラストは、京都精華大学学長／マンガ家の竹宮惠子が手がけました。

最初は「いっちょかみ」だったことでも、気づけば仕事になっている。

多田 実

経営科学

多田実
同志社大学政策学部教授。最近では、価値主導のマーケティング手法を活用した地域活性化に取り組み、京都市内、京都府北部、長野・南信州などの活動にも携わる。京都精華大学にて始動する新カリキュラムにおいて、副専攻講師としての就任が決定している。

領域を超えて広く学び、それを仕事にもしてきた2人が初対談。曰く「いっちょかみの凝り性」「開かれたオタク」という2人の姿勢は、いまこそ見習うべきところがたくさんありました。

まずは「いっちょかみ」で

すがや　僕はもともと小学生向けのマンガを描いていて、代表作が『ゲームセンターあらし』って非常にバカなマンガなんですけども（笑）。ただ、子ども向けのマンガって売れるときは何百万部でも、売れなくなったら途端にゼロという世界。そこでやっぱり、どうマンガを売っていくか、マンガ家として生き延びていくかというのは常に考えていたことなんです。マンガを教えるというと、技術や絵の方に向かいがちですけど、結局、絵を描けるだけではマンガ家にはなれない、イラストレーターにもなれない。何を描くかという企画の部分が7～8割を占めるので、どのように描くかはその後でいいんです。そのあたりで、マーケティングや市場調査というのも関わってくる分野だとずっと思っていました。

多田　私の専門はオペレーションズ・リサーチ、略してORというものですけど、あまり一般的な言葉じゃないので、経営工学、経営科学と言っています。統計学でも公式や計算式をやるのではなくて、それをどう社会や世の中に応用していくかということで、マーケティングリサーチというキーワードで教えています。たとえば、大学のゼミでは就活にマーケティングを活かそうということで、自分の強みや他人との違いをマーケティングの手法でリサーチして、レポートにまとめるということをやってみたりとか。いわゆる自己分析ですけど、そこにマーケティングを応用することができるんですね。そういう意味では、マンガ学科の学生がマーケティングを活かすということもできることだと思います。

すがや　実は今度、僕がこの大学で統計学についての公開講座を開く予定になっています。他にも財務省の職員に統計学を教えた経験もある、変なマンガ家なんです（笑）。それというのも、50代で早稲田大学のeスクールに入学して、2011年、60歳の還暦の年に人間科学部の修士課程を終えたんですけど、そのときに学んでいた「教育工学」で統計学が必修だったんですね。最初は、まったく統計学なんてわからなくて、「シグマって何？」という状態でしたが、大学から大学院にかけて6年間もやっていると、だんだんわかってきて、大学院の頃には自分でプログラミングを組んで、統計学の計算に便利なウェブサイトをつくったりもしました。

多田　簡易アプリみたいなものですね。それはすごい。私も実は、もともと統計学が専門ではなくて、「理系だからできるでしょう」という感じで、看護学校で教えることになったのが最初なんですね。まさか、統計学がこんなにブームになる日が来るとは思いませんでしたけど。

すがや　ほんとにそうですね。僕は気づけば、いくつものことがいつも平行して動いている感じでした。パソコン通信なんかも1985年からアメリカのネットにつなぎはじめて、インターネットが日本で本格的にはじまる前からホームページもつくってましたし、まだ大人向けの学習マンガがなかった80年代はじめに、大人も読める『こんにちはマイコン』というコンピューターの入門マンガ本を出しました。今、IT業界にいる40代の人たちから「あの本を読んでこの世界に入りました」といって、あちこちで大事にしていただいてるんです。

多田　大阪弁で「いっちょかみ」って言葉がありますよね。あれこれ趣味を広げて、そのなかで気に入ったものは深めていく。私もギターや映像編集など、凝ったものがいろいろとありまして、それが後々から人生を左右するような出会いにつながることも結構あるんです。最近だと、南信州の豊丘村のまちづくりを手伝っているんですけど、その村長さんが洋楽が大好きだということもあって、南信州をロックの聖地にしようということで「とよおかロックフェスティバル」という高校生バンドの音楽フェスを立ち上げました。お酒の席で話していたことが、気づけば県議会を通っていたんですけど（笑）、まさか自分のゼミで、音楽のイベントに関わる日が来るとは思っていませんでした。最初は「いっちょかみ」だったことでも、気づけば仕事になっている。

すがや　僕の場合は、「開かれたオタク」って言われたことがありますよ（笑）。一度レースマンガを描いたことをきっかけにして、F1やル・マンといったモータースポーツの現場を海外まで見に行ったりしてたんですが、いつの間にかF1の雑誌に記事を書いたり、インディ500の小説を書いたりもするようになって。インディ500のテレビ中継の解説に毎年呼んでもらったり、自分でレースチームをやっていたこともありました。

今の世の中、すごくマンガの発想というのが求められていると思うんです。

すがやみつる

マンガ／教育工学

すがやみつる
京都精華大学マンガ学部 キャラクターデザインコース教員。代表作『ゲームセンターあらし』をはじめ、これまでに手がけたマンガや小説、入門書などの著作は200冊を超える。

多田　そこまでいくと、もはや専門家ですね。僕もF1はかなり好きです。私とすがや先生に共通しているなと思うのは、きっと断れない性格なんですよ。それで、ちょっとやってみて、おもしろかったらどんどん深みにハマっていくという。

すがや　そうかもしれませんね。マンガでもイラストレーションでもそうなんですけど、結局、依頼からはじまる仕事ってとても多いんです。「こんなことをやってみませんか？」ってお願いされたときに、すぐに対応できるかどうか。そのためには幅広い関心と教養をもっていないと反応できませんし、知らないことだったら、まず調べにいくという行動力も大切です。

多田　「いっちょかみ」ということを真面目に言い直せば、「学際性」という言葉になります。私は、ORという専門分野から、マーケティングリサーチや地域活性化など、異なる領域へと研究を展開してきましたけど、既存の垣根を飛びこえて複数の分野が相互に混じり合うことの強みはすごくあると思いますね。

すがや　まったく同感です。僕がもうひとつ心がけているのは、「石橋は叩く前に渡れ」ということ。最近になって、アジャイル（俊敏な）とコンピューターの世界でよく言われていて、つまり、いいものをつくっても時間がかかっているようではダメだと。走りながら考えないと間に合わない時代なんですね。私の師匠である石ノ森章太郎先生も、「マンガは時代と寝る商売だ」と話してましたが、世の中の動きを自分で体感しながら、時代と走っていかなければいけないんだろうなと思います。

マンガの発想力を武器に

すがや　マンガのマーケットについて言えば、紙のマンガは明らかに縮小しています。紙の出版自体がシュリンクされつつありますから。実際、マンガ学部を卒業して、みんながマンガに関わる仕事につけるわけじゃない。だけど、今の世の中、僕はすごくマンガの発想というのが求められていると思うんです。マンガのおもしろさって何だろうって突き詰めると、デフォルメだったり、わかりやすさ、誇張といった伝える表現技術でもあると思うのです。僕が早稲田で「教育工学」を学んだ後、早稲田の社会人学生の卒論指導などもしていたことがあるのですが、いま思うと、そこで見たプレゼンは文字だらけでとても真面目なものでした。対して、精華大の学生は、ちょっとしたスライドをつくらせても、人に見せるという意識が高くておもしろいんです。そこはもっと活かせるところがあるんじゃないかなと思いますね。

多田　まさにおっしゃられるようなことを私も経験しています。私は、さまざまな大学の学生が集まってインターシップを行なう「大学コンソーシアム京都」でもゼミをもっているのですが、自分の担当に芸術系の学生が入っているとラッキーだと思うんです。というのも、議論をしていても、そういう学生って発想がまるで違うし、ちょっと模造紙にまとめて発表するときでも、すごく能力を発揮しますから。学生自身は、「自分たちは経済や経営学の知識がまったくないんで…」って遠慮してたりするんだけど、私からすれば、そんなものは1年でも本気で勉強すればすぐに追いつけること。それよりもアイデアや発想の力、デザイン力といったことは簡単にマネできないなと思います。

すがや　そういえば、コンサルティングの会社で働いてから、自分で起業するためにマンガの発想が必要だって、マンガプロデュースコースに入ってきた女子学生がいました。彼女もすごくびっくりしてましたね。発表といえば、予算や数字の話が出てくるものだと思っていたけど、ここではいきなりフライヤーをつくったりするって。

多田　そうですよね。だから私自身も、副専攻という形で精華大学に関われることをすごく楽しみにしているんです。今回、「芸術と文化で世界を動かす」という特集だと聞きましたけど、「こんな世界にしたいからこうする」っていうストレートなアプローチでは、たぶん何も動かせないんです。効率的に見えることや即効性を期待するんじゃなくて、むしろ、「これ一体、何に役立つんだろう」ということでいいと思うんです。ひょっとしたら、寿命を迎える1週間前に若い頃学んだことが役立つかもしれないんですから。

すがや　まずは「おもしろいものに飛びつく」でいいけど、どこかで深めていくフェイズは必要ですね。そのときに、基礎に戻ることをしないとわからないものがあるなって最近はよく思います。

多田　原点に戻ること、実はそれが一番大事かもしれないですね。

SUGAYA MITSURU × TADA MINORU

安田昌弘 × 吉岡恵美子

現場で実践しながらでも、学生が自分なりの理論をつくってくれるのが一番。

私自身も科学、人文、思想…いろんなものがひとつのフィールドに集まる場として展覧会をつくってきました。

ポピュラー音楽／文化社会学

安田昌弘
イギリスのレスター大学マスコミ研究所で日仏音楽産業の研究を行い、博士号を取得。2009年帰国後、京都精華大学人文学部准教授に。現在は、ポピュラーカルチャー学部音楽コース教員。

現代美術

吉岡恵美子
2014年まで金沢21世紀美術館でキュレーターとして勤務した後、京都精華大学芸術学部准教授に。企画した主な展覧会は『内臓感覚 - 遠クテ近イ生ノ声』『亡霊 - 捉えられない何か』など。

京都精華大学の教員として講義をしながら、学外でもさまざまな場や企画に携わっている2人。音楽と文化社会学、美術と国際政治、実はそれぞれのバックグラウンドも領域横断的なんです。

街で場を立ち上げること

安田　今度、うちのゼミ生たちと一乗寺でライブイベントをやるんです（『the Day of Pleasure』12月11日）。僕が人文学部で教えていた頃にも、学生の発案で一度やったことがあるんですけど、昨年から一乗寺の飲食店が中心になって、また立ち上げようとしていて。今年は8会場で、30組以上のアーティストが出演して、そのうち2会場を僕のゼミで担当しています。

吉岡　今までになかった街のイベントをつくられたのですか。

安田　そうですね。なので、祭りにも参加して神輿を担いで、町会の方に顔を覚えてもらうようにしたりとか。ゼミの前期は、どこが会場に使えそうだとか、フライヤーを置けそうな場所とかを考えながら、みんなで毎週のように一乗寺の街を散歩していました。そうすると街が異化され、ライブ会場にしか見えなくなってきて。森のなかでキノコを探すようにしてると、ある時点から急にキノコしか見えなくなってくるような感じです。

吉岡　わかります。全然違った景色が見えてくるんですね。

安田　昔、一乗寺には京都のミュージシャンがたくさん住んでいて、「磔磔」「拾得」といったライブハウスでライブをした後、一乗寺の「天一」（※ラーメン店「天下一品」の総本店）でラーメンを食べて帰るといったライフスタイルがあったそうなので、そんな話もしながら散歩して、「じゃあ、２０１６年にここでライブをやるならどんな人がいいか」ってことを学生にも考えさせます。まずは、その場に入りこんで、肌感覚で感じてもらうってことをやっているんですね。

吉岡　私の担当している授業でも、実際にひとつの企画展をキュレーションして立ち上げるということをやっています。ギャラリーや美術館じゃない場所でも美術の表現がありうるという、オフミュージアム的な動きも教えながら、安田先生のゼミと同じように前期はあちこち会場を訪ねて展覧会を見ます。ただ、場所が定まらないと企画が進まないので、わりと早い時期に会場は決めるようにしています。今年度は、三条通の繁華街にある「Gallery PARC」でやることになったので、その場所でどんなテーマ、どういった作家で展覧会を企画するか考えています（『empty park展』17年1～2月開催予定）。一方で、「瀬戸内国際芸術祭」での高見島、「越後妻有トリエンナーレ」での枯木又のプロジェクトに関わっていまして、こちらは大学とは別の活動なので有志の学生だけが参加しています。過疎化した土地が舞台なので、実際のところ、芸術だけでは何ともしがたくて、もっといろんなビジョンが求められている。場所や歴史の読み取りからはじめて、悩んだり考えたりしながら、つくっていく過程から学生にも見せたいと思っています。

安田　そういった企画を立ち上げる場合、授業時間以外で動かなければいけないこともたくさんありますよね。だけど、学生ってすごく忙しい（笑）。結果、なかなか遊びにも行けてないという状況ではないですか。

吉岡　そうですね。どうしても動ける学生と動けない学生が出てくるので、話し合ったことなどをシェアする仕組みなんかもつくりながら進めています。ただ、大学というのはやっぱり授業以外の時間も含めて学んでいくもの。どこまでが授業とは線を引けないところもあると思います。

境界線を引くのではなく

安田　僕の専門は文化社会学なんですが、ドクターのときに使っていたのは、ピエール・ブルデューというフランスの社会学者の方法論で、特に、フランス語でいうシャン、「場」の理論をヒップホップに応用して研究していました。音楽の専門家というよりは、音楽が人と人をつなぐ関係性を考えるみたいなことをやっていたんです。ブルデューの理論では、答えがひとつではなく、いろんな意見がぶつかりあってるから、シャンは自律してあると。もし、答えが定義されたら、そこでシャンは消えていってしまうんですね。とはいえ、実技系の学部でこういった社会学の理論をきっちり教えようと思っても、なかなかままなりません。実習のゼミのなかでも、ときどき理論の話を混ぜながらやっています。

吉岡　日本画や彫刻といった専攻に対して、私はわりとニュートラルな立場なんですけど、そもそも、私は大学の学部時代、国際政治学を専攻していたんです。ところが、アメリカに1年間留学した際に、言語の不安もあって美術の実技や講義をとりはじめたら、そのほうがおもしろくなってしまって、日本に戻ったときには目標が美術に変わっていました。その後、紆余曲折あって、金沢21世紀美術館の立ち上げから関わることになるのですが、そこで出会ったキュレーターたちは、経済や法律など、少なくとも学部では私のように美術史を専攻してこなかった人たちもいました。

安田　そうなんですね。

吉岡　つまり、現代の美術の現場において、もはや美術史だけが有効なバックグラウンドではなくて、それぞれの視点を活かした企画っていうのがありえるということなんです。だから、企画展をつくる私の授業でも、本当は、建築、マンガ…いろんな学科の学生に入ってきてほしい。その方が有意義なんじゃないかと。

宮台真司さんが言われたような状況ですね。そこで、どうやって50年前の音楽や、大きなメディアには乗らないけど京都ローカルで活動を続けているようなミュージシャン、あるいは地元のレコード屋なんかに学生の目を向けさせられるか。やっぱり、自分で場を立ち上げていこうとするなら、関わってくれそうな人たちとのコネクションをもっておかないと、なかなかおもしろいことはできないと思うんですよ。

吉岡　難しいところですよね。美術の枠組みもどんどん広がってるような状況で、私自身も科学、人文、思想…いろんなものがひとつのフィールドに集まる場として展覧会をつくってきましたので、専門に明確な境界線は引けません。ですが、私がこの大学に来た1年目の講義で、「先生がいう現代美術はおもしろいけど、自分のやりたいことではありません」って、すぐに線を引いてしまう学生が結構いたことがショックでした。高校の美術教育とのギャップもあると思いますが、自分が見慣れない思考や表現の広がりを目にしたときに、自分のフィールドに閉じこもってしまうのかもしれません。

安田　狭いところに充足するのではなくて、飛びこむ力を育てたいですね。吉岡先生はそこの橋渡しをどうしていますか。

吉岡　私は美術史家ではないので、あくまでも現代、今を軸足にしながら、話題ごとにその成り立ちや起源へと遡ってみるようなことをしています。たとえば、現代美術のインスタレーションってどのあたりが起源なのか、定説はありませんがそこを考えさせます。勘のいい学生が「日本の伝統的な宗教建築であるお寺もインスタレーションかもしれない」って言ったりとか、自由に議論を飛ばしながら学生には考えさせて、その後でだんだんと私がまとめていくようなやり方をとっています。

安田　理論や定説はあるにしても、現場で実践しながらでも、学生が自分なりの理論をつくってくれるのが一番ですよね。この枠組みで世界を見なさいって押しつけるよりは。そのためにも、学生にはなるべくフットワークを軽くもってもらいたい。

吉岡　先生と学生の立場で見ているものや関係性がまるで違っているのは当然なんですが、学生の間でも全然違った意見をもっている子が同じ授業にいることが、これからますます重要になってくると思いますね。

安田　次年度から、全学部をシャッフルして領域を横断するようなカリキュラムが入ってくることで、学生同士のネットワークもまた変わってきそうですから、楽しみですね。

場になって、できあがる展覧会もおもしろいものになるだろうと思います。

安田　ブルデューの話の続きでいえば、「場」を形成するひとつの条件にあげられるのが、共通のリソースが参照点としてあること。共通のリソースは歴史や作品の積み重ねなどから生まれて、そこに対して自分を位置づけることで場が形づくられます。ところが、00年代に入って、その共通項が失われてしまいました。インターネットで情報が簡単に手に入るから誰も深く掘ろうとはしないし、小さなコミュニティの中で充足して、その外側に関心が向かない。島宇宙とか、“仲間以外はみな風景”って宮台真司さんが言われたような状況ですね。そこで、どうやって50年前の音楽や、大きなメディアには乗らないけど京都ローカルで活動を続けているようなミュージシャン、あるいは地元のレコード屋なんかに学生の目を向けさせられるか。やっぱり、自分で場を立ち上げていこうとするなら、関わってくれそうな人たちとのコネクションをもっておかないと、なかなかおもしろいことはできないと思うんですよ。

吉岡　難しいところですよね。美術の枠組みもどんどん広がってるような状況で、私自身も科学、人文、思想…いろんなものがひとつのフィールドに集まる場として展覧会をつくってきましたので、専門に明確な境界線は引けません。ですが、私がこの大学に来た1年目の講義で、「先生がいう現代美術はおもしろいけど、自分のやりたいことではありません」って、すぐに線を引いてしまう学生が結構いたことがショックでした。高校の美術教育とのギャップもあると思いますが、自分が見慣れない思考や表現の広がりを目にしたときに、自分のフィールドに閉じこもってしまうのかもしれません。

安田　狭いところに充足するのではなくて、飛びこむ力を育てたいですね。吉岡先生はそこの橋渡しをどうしていますか。

吉岡　私は美術史家ではないので、あくまでも現代、今を軸足にしながら、話題ごとにその成り立ちや起源へと遡ってみるようなことをしています。たとえば、現代美術のインスタレーションってどのあたりが起源なのか、定説はありませんがそこを考えさせます。勘のいい学生が「日本の伝統的な宗教建築であるお寺もインスタレーションかもしれない」って言ったりとか、自由に議論を飛ばしながら学生には考えさせて、その後でだんだんと私がまとめていくようなやり方をとっています。

安田　理論や定説はあるにしても、現場で実践しながらでも、学生が自分なりの理論をつくってくれるのが一番ですよね。この枠組みで世界を見なさいって押しつけるよりは。そのためにも、学生にはなるべくフットワークを軽くもってもらいたい。

吉岡　先生と学生の立場で見ているものや関係性がまるで違っているのは当然なんですが、学生の間でも全然違った意見をもっている子が同じ授業にいることが、これからますます重要になってくると思いますね。

安田　次年度から、全学部をシャッフルして領域を横断するようなカリキュラムが入ってくることで、学生同士のネットワークもまた変わってきそうですから、楽しみですね。

YASUDA MASAHIRO　YOSHIOKA EMIKO

すでにはじまっている!?

京都精華大学の注目講義あれこれ。

2017年度から新たにはじまる全学横断プログラム「SEEK」では、
11分野の教養教育科目が新たに設置されます。
が、それは大学全体における制度改革の話。
その兆しとなるような講義は、それぞれの先生方がもうはじめています。

写真撮影でおじゃました授業は、籔内智先生による「英語2」。授業の内容は文法、そう聞くだけで苦い顔をする人もいるかもしれませんが、籔内先生の授業は決して退屈なものではありません。

まずは、国連による〝World Happiness Report〟（世界幸福度報告書）を話題に、「さて、日本は何番目だと予想しますか?」といった英語でのやり取りをしながら、簡単にウォーミングアップ（ちなみに、157カ国中53位。〝karoshi〟（過労死）は英語の辞書に掲載されてるなんて話題も）。その後も、文法の例文にビートルズの歌詞を使ったり、メディア英語のレッスンとして、「ミシガン州の高校生が学校の蛇口から出る水の色がおかしいとツイートして停学に」というウェブニュースを素材にしたり。そして、英作文の課題は〝Let's write about a part-time job〟、アルバイトがテーマです。

「いろんな英語の側面を紹介しながら、ちょっとした気づきを与えてあげることが大切だと考えています。そのためにも身近な話題だったり、学生自身が実際に関わりのある状況を設定して授業を進めています」と籔内先生。

無味乾燥にもなりかねない英語の文法の授業だって、やり方次第では社会へとつながる機会に変わります。何のための語学、教養、講義、演習なのか。大学で学ぶ意味を先生ひとりひとりも追求しています。

たとえばこんな
教養教育科目が
開講予定

哲学

担当:
佐々木 中
（人文学部教員）

「哲学って何ですか？」。これが哲学という語を見た多くの人びとが最初に発する問いだ。気持ちはわからないではない。が、少しその問いは早すぎはしないか。君は勢い込んでこうまで言うだろう。「哲学って何の役に立つんですか？」そう言う君も「サッカーって何ですか？何の役に?」とは問わないし、絵画についても民主制についても料理についても服についても問わない。これは大変おかしなことだ。 さて、ここからはじめよう。

身体論

担当:
栗巣 満
（人文学部教員）

加速的にスピード化し合理性や能率性、結果が求められる現代社会において、より充実した学生生活を送るためには、それとどのように向き合うことが望まれるのであろうか。この授業では、そのヒントを各種内臓諸器官を支配している「自律神経」に着目することで、「身体の言い分」に耳を傾けてみたい。 古代ギリシアにおいて既に確認されている「魂（精神）と肉体（体）」の密なる関係ではあるが、それを再検証することで、複雑化を増す現代社会を生き抜く術を見い出せればと考えている。

科学史

担当:
斎藤 光
（ポピュラーカルチャー学部教員）

科学と科学技術は現代社会の基盤となっている。科学史では、科学や科学技術とは何か、どのように誕生し今に至っているのか、私たちとどう関係しているのか、を学ぶ。ただ科学や科学技術も広い。ここでは「性」にかかわる生命科学や医科学を軸に社会との関係も考えていく。文化や芸術などを専攻するとき、科学･科学技術への批評的視点が大事になる。この講義を通して、科学や科学技術を相対化できる方法を身につけてほしい。

サウンド演習

担当:
落 晃子
（ポピュラーカルチャー学部教員）

「音」は生活や、全ての活動と切り離せないものです。音の基本知識を学びながら、野外や屋内などでハンディレコーダーを使ってさまざまな音を録音し、音地図（サウンドマップ）作りを体験します。また、パソコンをはじめとした様々な制作ツールや手法について学びながら、「音」による音響作品を作ります。「音楽」だけではない、多様な「音」の世界を日頃から意識することにより、表現方法も豊かになることでしょう。

大学入門

担当:
各学部教員

1年生必修の「大学入門」は、精華大をよく知り、学びの基本を身につける科目です。本学の成り立ちや歴史から、ノートの取り方、レポートの書き方、資料の探し方、図書館の使い方などを学び、その後の学修を充実させるための基礎を固めていきます。専門科目への展望も紹介しながら、大学での学びの仕組みを理解し、勉強の進め方に対する不安を少なくし、自ら学ぶことができる大学生になることをめざします。（教務部 松井雅）

ことば演習

担当:
髙橋伸一、他
（人文学部教員）

語ることによって初めて私たち自身の考えが形作られる。この前提のもと、自らの思索を深めるため、自らを語ることばの獲得を目指します。そのためにアクティブラーニングを取り入れ、グループワークによる連詩や、批評、エッセイの実作など種々のワークを通して心の中のことばを引き出し、それをみんなと共有することにより外の世界とつながっていく。そんな場を提供するのがこの授業「ことば演習」です。

芸術学

担当:
佐藤守弘
（デザイン学部教員）

本講義では、歴史的、理論的な観点から芸術を捉える視点を提供したいと思います。前半のテーマは、芸術作品がそれを受容する人びとにどのように情報を伝えているのか、そのメカニズムについて考えることです。ここで扱う「芸術」とは、絵画だけではなく、映画やマンガ、デザインなど、幅広いものです。そうした理解を踏まえた上で、後半では、近代の絵画や音楽において「芸術」という概念がどのように形成され、変化してきたのかについて見ていきたいと思います。

政治学

担当:
佐藤一進
（芸術学部教員）

生きる限り、政治とは切っても切れない関係にあるのが人間です。政治とは他者とともにあること、しかも時間をこえてそうあることを意味する営みだからです。この講義では、政治学的な知見や知識を詰め込んでもらうのではなく、先のような観点にもとづき、政治思想の歴史（古代西洋から近代日本まで）から各種のテーマを取り上げ、受講者に、自らを政治主体として想定した上で、多様な事例に即した思考実験に取り組んでもらいます。

2017年度、全学部横断プログラムはじまります。

「開学以来の大改革」というオリジナル教育プログラム「SEEK」が2017年度から本格的にスタートします。11のカテゴリーに分かれた”教養教育”と、8の切り口からなる”副専攻”を、所属学部を横断して学ぶことになるそのプログラムの意味と可能性について、吉村和真副学長に聞きました。

—どうして今、改革に踏み切ることになったのでしょうか。

吉村　現在、京都精華大学は5つの学部で構成され、さらに各学部は学科や、コースで分かれていますが、それぞれの専門性を重視する一方で、横の連携がいつの間にか薄くなっていました。そして、本学がもともと持っていたコアの部分、つまり建学理念に基づく教育もまた分散化していたのでは、という問題意識がひとつのきっかけになっています。

—京都精華大学のコアとは何ですか？

吉村　京都精華大学は1968年の開学以来、芸術学部と人文学部という2つの柱をもっていますが、言い換えると、単なる芸術大学ではないし、文系の大学でもありません。決してそれが中途半端ということではなく、芸術と文化の足し算によって1＋1が3にも4にもなるというのが京都精華大学の強みなんです。開学時といまの社会状況は似ているところがあるのですが、世界が流動化して、大文字の学問や政治、教育といったことの価値観が揺らぐなか、官僚主義から遠く離れて、本来の学びの場を取り戻そうというところから、京都精華大学は生まれました。建学の理念としてうたわれる、「自由自治」の精神もそこに通じています。そういった意味でも、今のような時代にこそ一番求められるべき大学のはずだという思いがあります。

—ともすれば各学部のユニークさが先行して、そうした京都精華大学のポジションが見えにくいものになっていたのかもしれません。

吉村　そうなんです。まあ、そうした理念は、高校生からすればうざがられる部分でもあるかもしれませんが（笑）。でも、ひとクラスに何人かはそこに共感する子もいるはずで、「今の社会ってなんか違うよね」に対して、しょうがないと言うのではなく、自分ができることを考えようという学生に京都精華大学を選んでもらいたい。

—そのためにも、専門性を深めることにプラスして、今回の教養教育、副専攻が導入されるわけですね。

吉村　考えること、表現すること、その往復関係がまずあります。次に、それを広く社会に届けて、その解釈や受け止められ方からもう一度、自身の活動、創作に還元するという大きな循環がありますけど、そこまで見通して教育を考えていくと、技術だけを学ぶのでは足りない。広い教養と専門的なスキルの両立が必要になります。ただし、その教養というのは時代によって変わってきますから、今回、11のカテゴリーで教養教育科目を再構成して、専門分野を支える「根」にしたいと考えています。そして、それらの学びを社会に接続するために、8つの切り口で副専攻科目を準備しました。

—副専攻は、専門を社会に活かすためのチャンネルというわけですね。

吉村　そういった意味で、副専攻は「社会展開科目」とも呼べるものです。ただ、ここで気をつけたいのは、社会に適応といえば就職の話になりやすいのですが、単に就職率を何%に上げるということでは解決しないのが、いまの社会状況だと考えています。もし既存の価値観に絡めとられて、自分のやりたいことが発揮できないというのであれば、この社会自体を変えていく力が必要になるんです。だから、そこまでリーチを伸ばそうとしています。もちろん、就職率をおろそかにするという話ではありません。ただ、就職の数というよりは質、つまり長い目でみた「生き方」にこだわりたいと思います。

—全学部横断ということにはどういった意味がありますか。

吉村　基本的に、教養や副専攻だけを担当する専任教員は置かずに、各学部の専門の先生方に兼任してもらう形で、全学部をつなぐ「全学教育機構」を立ち上げます。これまでは、各学科、コースが入り口になっていましたが、そこをがらっと転換して、表玄関がひとつになると言えばわかりやすいでしょうか。比喩的に言えば、これまでの京都精華大学の歴史は「増築」の歴史でした。ですが、今回の改革については、増築ではなくて「建て直し」だと考えています。間もなくやってくる開学50周年を前に、京都精華大学で学ぶ意味をより深く突きつめて、そのことをうまく伝えていきたいですね。

全学共通「SEEK」プログラムとは

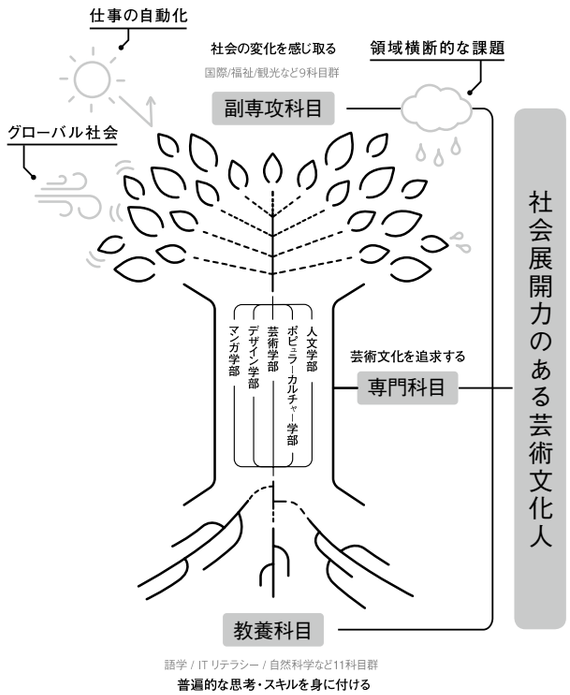
本学が半世紀近くにわたり取り組んできた学部ごとの「専門教育」に加え、2017年度から全学部を横断する「教養教育科目」と「副専攻科目」を設置。芸術、文学、音楽といった「専門性」を深めることはもちろん、その力をビジネスや環境、福祉など「社会で展開」できる能力を兼ね備えた芸術・文化人の育成を目指します。

教養教育科目について

人権、歴史、政治、哲学、語学、科学などの学びを通じて、人間、社会、自然への理解を深めることで多様性のある視点を育て、自分の専門性の基盤を強くし、より豊かにすることを目的としています。さらには、ITリテラシー、表現技法、キャリア、フィールドワークなどの実践的な科目も含めた11分野の学びを用意しています。

副専攻科目について

世の中の変化を鋭敏に感じ取り、専門性を社会に展開する切り口として、国際、環境、京都伝統文化、ビジネス、ソーシャルデザイン、福祉、観光、コンテンツマネジメントという8つの科目群を設置。それらの分野における理論と実践の両方を学ぶことができます。



これまで本学が培ってきた高い専門性を、教養という根を広げることで支え、環境の変化を感知して伸びる枝葉のように、副専攻が社会との接点を創出します。

京都市左京区にオープン

開かれたアトリエ THE SITE

本学が産学連携により株式会社フラットエージェンシーとともに京都市左京区に所有する校舎をリノベーションし、誕生した「THE SITE」。アーティストやクラフトマンが集まり、新たな活動・情報発信の場所になってほしいという願いを込めたシェアアトリエです。今回は、THE SITEの詳細な情報とともに、さまざまなその姿をお見せします。

かつて閉校した美術学校。その建物を所有した本学は、２０１６年に株式会社フラットエージェンシーとの産学連携により、新たなシェアアトリエを生み出すこととしました。多くのアーティストやクラフトマンがいる京都市左京区というエリアにおいて、彼らが集まり、拠点となる場所を作るということは、新たな活動や展開、コラボレーションからの創造が期待できるだけではなく、芸術文化振興の新しい発信地としての役割を担うことができると考えたためです。

建物は通りを挟んだ４階建てと２階建ての２棟からなり、株式会社フラットエージェンシーの主導でリノベーションが行われました。各部屋や階段、廊下の壁には、かつて美術学校だったころの名残である絵の具の跡や学生たちの落書きをあえて残し、空調設備や水道といった内部構造のほか、老朽化している部分などが整えられています。制作に適した雰囲気を保ちながらも、没頭しやすい環境となっており、また、本学の卒業生やかつて美術学校に通われた方などは、建物に入ればどこか懐かしさを感じられるかもしれません。

現在、THE SITEにはアンティーク雑貨を扱うショップや靴工房、デザイン事務所、ボードゲーム制作事務所、洋菓子店、カメラマンや洋画家など、多彩な店舗、職種、アーティスト、クラフトマンの方々が入居。それぞれが精力的な活動を行っており、THE SITEを中心にした新しいものづくりやコラボレーションにも高い意欲をもっています。入居者が共同で利用できる工作室や談話室もあり、交流を手助けする環境整備も万全です。そのほかにも、４階建ての建物の１階にはカフェがオープン予定。THE SITEの入居者や足を運ばれた方はもちろん、地域住民との交流の場となることが期待されます。また、同建物の４階には入居者以外の方でも利用できる展示スペースを設けており、展示会やワークショップなど、さまざまな形で使用することが可能です。

建物内、建物外、地域内、地域外。多くの人々が訪れ、接点をもち、交流することで、これまでとは違った新たな観点やイメージ、技術などが生まれます。そしてそれは、まったく新しい作品や文化を創造してくれるかもしれません。かつての学び舎だった過去をシェアアトリエとして受け継ぎ、これからの未来へ。THE SITEが芸術文化の振興という役割だけでなく、その新たな礎となることを願っています。

写真で見るTHE SITE

② 美術学校の記憶

床や壁には、美術学校時代の記憶が刻まれています。飛び散った絵具の跡は、かつての学生たちが熱意をもって制作を行った証。塗り直さずに残される入居者も多くいます。

① 室内空間

過去の名残がありながらも、過ごしやすい環境となるように万全のリフォームが施された室内。2016年11月現在では1室の空きがあります。お問い合わせについてはページ下部参照。

③ 中庭

4階建ての建物には、中庭が備えられています。クローバーなどが植えられ、芽吹けば庭一面に緑が広がります。ひと息つくには、うってつけの光景となるでしょう。

④ 店舗

4階建ての建物の1階にはアンティークグッズや雑貨を取り扱うお店があります。2階には靴工房が入居しており、体験ワークショップが定期的に開催されています。

⑦ ギャラリー

入居者だけでなく、さまざまな方が利用できるギャラリー。大きくとった窓からはやさしく日が差し込み、室内をやわらかな明かりで満たします。

問い合わせ先
株式会社フラットエージェンシー 本店
TEL 0120-75-0669 / 075-411-0669
FAX 075-431-0660
E-mail honten@flat-a.co.jp

⑥ 談話室

地下に設けられた入居者専用の談話室です。奥にはシャワー室も。壁にプロジェクターを投射し、映画上映会などを行うこともできます。

⑤ 工作室

黒板などが残された、広いスペースの工作室。入居者の共同利用から、ワークショップイベントの開催まで多岐にわたった利用が可能です。

社会人講座 ただいま開講中

本学ではキャンパスをさまざまな方の
学びの場としてとらえ、
学生だけでなく卒業生や一般の方も
参加可能な講座を多数開講しています。
充実した設備でさまざまな分野の専門家から、
実際に手を動かしながら学ぶことができる、
またとない機会。今回は、実際にどのような内容で
講座が行われているのかをご紹介します。

「公開講座ガーデン・レクチャーガーデン」や「文化・芸術教養講座」など、本学では在学生のみならず卒業生から一般の方までを対象に学びの機会を設けています。これまでも幅広い年齢層の方々が講座を受講され、さまざまな専門家から直接の指導を受けています。

「文化・芸術教養講座」では、正規科目で文化と芸術をしっかりと学ぶことを目的に、学生とともに半年間授業を受けながら知識と技術を培います。後期の開講として平安文学や絵巻物等から日本の文化を学ぶ「京都発、日本文化入門」コース、型染め・蝋染めの作品制作技術と知識を身につける「テキスタイル入門」コース、芸術鑑賞やディスカッションを通じて、アートと社会をつなぐための知識と経験を修得する「アートマネジメント」コースの3コースを開設。そのなかで「テキスタイル入門」コースを受講されているのが、主婦の宮崎さんです。染め作品の制作にずっと興味をもたれており、現在は子育てもひと段落したため、受講を希望されたと言います。

「テキスタイル入門」コースは、座学と実技を組み合わせて行われます。お話を伺った際、宮崎さんは型染めの制作途中。学生に混ざり、ときに朗らかに会話をしながら作業を進めていました。染めた布を蒸し器からとりだし、光彩館の大きな水洗い場で、学生とともにジャブジャブと布に塗った糊を落としていきます。「風景画になにかを足す」。このような課題から生まれた宮崎さんの作品が、徐々に完成間近の色合いを見せてきます。「思ったより大変だったんですが、それでも楽しさが上回ります。それに、こうやってできあがりを見ると、これまでの大変さは吹き飛んでしまいますね」。学生たちと作業を手伝い合い、「きれいだね」とはしゃぎながら、笑顔を見せる宮崎さんの姿は、学生時代に戻ったかのような明るさと楽しさを見せていました。

「京都発、日本文化入門」コースでは、上柳さん、谷川さん、内田さんの3人の受講生が学生に混ざり、真剣な眼差しで授業を受けていました。このコースでは、座学を中心に平安文学や絵巻物などの原典を読み解く力を身につけていき、それらを通じて京都を中心とする日本の文化を学びます。今回、伺った際に行われていた授業は「くずし字講読」。江戸時代の書物や文書、絵本を用いてくずし字（変体仮名）を読む訓練を行い、その言葉や図像から、江戸庶民の生活、習慣、思想などを理解。江戸文化に対する知見を広げていくことが目的の授業です。

授業終了後、3人に受講の感想を伺いました。「京都のことをもっと深く知り考えたく、受講することに。これまで知らなかったことを知ることができ、とても楽しいですね。コメントカードなどの発表を通じて学生たちの授業に対する感想が聞けるので、そういった考え方があったのかと、いつも新鮮な気持ちになります」と上柳さん。

谷川さんは「これまでずっと、学びも職も技術メインで歩んできました。ずっと、文化を体系的に学ぶ機会が欲しいと思っていたのですが、そんなときにこのコースを知り、受講を決めましたね。もともと、お寺や神社が好きだったんですが、授業を経ることで文化や歴史という違った目線をもつことができ、一層寺社巡りにはまりました。学生たちと授業を受けるのも、自身の良い刺激になっています。これからも、頭にある断片的な知識を繋げていくため、授業はもちろん、たくさんの本を読んでいきたいですね」と話されました。

そして、「日本文化の基本的な部分を学ぶことができ、知見が広がったように思います。旅行やお出かけをするのが、とてもおもしろくなりましたね」と内田さん。知識を得ることで日常のなかでの発見が生まれ、それを掘り下げていくことでまた新たな発見が生まれる。毎日がより充実しているのだと、楽しそうに話す3人の姿は、強くそう感じさせてくれました。

本学では今後も、さまざまな社会人講座を開講していきます。興味をもたれた方は、この機会にぜひ受講してみてください。知識や技術を得ることで、新たな世界が広がっていくかもしれませんよ。

他にもこんな講座がありました

文化・芸術教養講座

「アートマネジメント」コース

キュレーターである教員らとの「瀬戸内国際芸術祭2016」の鑑賞体験などを通じて、アートと社会をつなぐための知識と経験を修得します。

文化・芸術教養講座
資料請求・問い合わせ先　京都精華大学 学長室学術振興課
TEL 075-702-5263　FAX 075-702-8819
E-mail crelab@kyoto-seika.ac.jp

公開講座ガーデン・レクチャーガーデン

学校での事故・事件と どのように向き合うか

教育学や子どもの人権論の専門家として実際の現場で調査を行い、関係者の声に耳を傾けてきた講師が、具体的な事例や対策に関する取り組みをもとに4つのテーマで語ります。

クリエイターのための 統計学講座

『ゲームセンターあらし』などで一斉を風靡し早稲田大学や財務省でも指導経験をもつ、教員のすがやみつるを講師に、アンケートの作り方も交えつつゼロから統計学を教えます。

音響作品制作講座

屋外や屋内にある、日常のさまざまな音を録音、採取。それらを素材にしコンピュータ上で編集することにより、電子音響音楽作品の制作体験をすることができます。

王朝貴族の恋文講座

男女が直接対面することのなかった平安時代、人々はどのように恋心を伝えてきたのか。三十一文字（みそひともじ）に込められた思いを『古今集』などから読み解きます。

公開講座ガーデン・レクチャーガーデン
問い合わせ先　京都精華大学 社会連携センター
TEL 075-702-5263　FAX 075-702-8819
E-mail garden@kyoto-seika.ac.jp

NEWS & Topics

大学ニュース

在学生や卒業生の活躍、大学の取り組みなど、
京都精華大学の最新情報を紹介します。

学生たちが、カップルからの依頼を受け、挙式をプロデュース

ポピュラーカルチャー学部の学生たちが、授業の一環で、挙式をプロデュースしました。京都市在住のカップルから「特別な時間を皆で楽しめる挙式を開いてほしい」との依頼に対し、ウェディングプランナーやシェフからのアドバイスで、会場の演出、装飾、食事から音楽に至るまで総合的にプロデュース。オーダーメイドでウェディングドレスも製作しました。

ファッションとアイデンティティの関係性を考察する展覧会「Fashioning Identity」を開催

撮影：表恒匡

7月1日〜8月5日までの期間、ギャラリーフロールにて開催された本展は、ポピュラーカルチャー学部教員の蘆田裕史が企画。演劇や写真などのさまざまな領域で活躍する4組の作家（イナ・ジャン、マームとジプシー、森栄喜＋工藤司、YANTOR）の作品を展示し、多くの反響をいただきました。

「瀬戸内国際芸術祭2016」に、在学生、教員、卒業生が出品しました

3年に一度開催される現代アートの国際芸術祭「瀬戸内国際芸術祭2016」。春から秋にかけて3つの会期で開催され、それぞれに、大学院芸術研究科博士前期課程2年生 竹腰耕平さん（夏会期・小豆島）や芸術学部洋画コース卒業生の中島伽耶子さん、後藤靖香さん（どちらも秋会期・高見島）をはじめ多数の教員、卒業生が参加。さまざまな力作が出品されました。

中島伽耶子「時のふる家」

出品作家
竹腰耕平（大学院 芸術研究科 博士前期課程 2年）
中島伽耶子（芸術学部 洋画コース 卒業）
若林 亮（大学院 芸術研究科 博士前期課程修了）
後藤靖香（芸術学部 洋画コース 卒業）
田辺 桂（芸術学部 陶芸コース 卒業）
小川文子（芸術学部 陶芸コース 卒業）
中村裕太（大学院 芸術研究科 博士後期課程修了）
芳木麻里絵（芸術学部 版画コース 卒業）
山極千真沙（芸術学部 陶芸コース 卒業）
出川 晋（芸術学部 陶芸コース 卒業）
三重野 龍（デザイン学部 グラフィックデザインコース卒業）
竹内祥訓（芸術学部 版画コース 卒業）
塩田千春（美術学部 洋画専攻 卒業）
内田晴之（芸術学部 教員）
李 禹煥（芸術学部 客員教員）
妹島和世（デザイン学部 建築学科 客員教員）

多様な文化理解と価値観を育てる国際学生寮を、2017年3月に開設

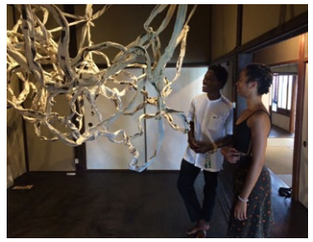
本学生寮は、留学生と日本人学生がともに生活し、交流を通して国際感覚を磨くとともに、さまざまな価値観に触れて多文化を学ぶ、実践的な教育の場です。居室は留学生と日本人の2人1部屋で、寮内にはレジデント・アシスタント（RA）として上級生が居住することで、寮生の生活をサポートします。また、教育プログラムや各種交流イベントなど多彩なプログラムを展開する予定です。

【寄付のお願い】国際学生寮はみなさまからの寄付によって設備の充実を図っていきます。
より良い京都精華大学を創造するべく、温かいご支援・ご協力を心よりお願い申し上げます。
詳細は寄付募集Webサイトをご覧ください。http://www.kyoto-seika.ac.jp/donate/

学生のプロダクトデザインしたメガネが発売

プロダクトコミュニケーションコースでは、2015年度より株式会社ボストンクラブと連携し、「アイウェア・デザイン」を学ぶ授業に取り組んできました。その授業を通じてデザインした4年生の長谷川千波さん、藤田悠貴さん、北野瑠菜さんのメガネが、株式会社メガネトップが展開するアパレルメガネショップALOOKより発売されました。

留学生が「京都」での体験を、アート、デザインで表現



留学生たちが「京都」という異文化体験をもとに「視点（Regards Coises）」をテーマにした作品を岩戸山の鉾町にある京町屋「THE TERMINAL KYOTO」にて展示しました。出展者には、海外協定校へ渡って学んだ日本人学生も含まれ、外国人から見た「京都」、日本人から見た「外国」を、それぞれの「視点」から作品で表現しました。

「FLOWER HUDDLE」展を開催しました

ポピュラーカルチャー学部の客員教員を務める藤原ヒロシ氏のもとに集まった、クリエイションやPRを学ぶ学生集団「S.U.C.C.」。東京・神宮前のThe Massにて「花」をモチーフにした作品を集めた展覧会「FLOWER HUDDLE」を開催しました。

嵐電の魅力を、学生の視点で社会に発信「京都精華大学×嵐電の連携プロジェクト」

ビジュアルデザイン学科の学生たちが、嵐電（京福電気鉄道株式会社嵐山本線）をテーマにした広告制作に取り組みました。その作品発表として、8月27日〜9月11日の期間、中吊り広告、額面広告、電車のヘッドマークに至るまで、すべての広告枠を学生たちの作品でジャックした嵐電が運行されました。

滋賀県長浜市との連携・協力に関する包括協定を締結

本学は滋賀県長浜市との連携・協力に関する包括協定を締結しました。今年度から市が始めた「長浜ものがたり大賞」と題したマンガとシナリオ作品の募集において、マンガ学部が審査員等で協力していることがこの協定締結のきっかけとなりました。今後は長浜ものがたり大賞への協力をはじめ、文化芸術に関する様々な連携・協力の事業を推進していく予定です。

アニメーション学科の学生が、ダンスイベント「LiveKids」25周年のオープニングアニメを制作

本作品は、アニメーション学科1、2年生を中心に総勢20名が半年をかけて制作し、8月21日にロームシアター京都で上映されました。学科初のデジタル作画で制作されており、株式会社スタジオコロリドや、株式会社ワコム、『CLIP STUDIO』を提供する株式会社セルシスからの技術提供・ソフトウェアとハードウェア提供を受け、産学連携で実現しました。

「伊藤若冲生誕300年記念ブックフェア」のしおりを学生たちがデザイン

このブックフェアは京都府書店商業組合が中心となり、京都府内の書店で11月3日から開催されたもので、その企画の一環として芸術学部版画コースの学生たちが若冲をイメージしたしおりをデザインしました。そしてネット投票で上位となり、実際に製作されたしおりは、フェア実施書店約50店舗で対象書籍購入者にプレゼントされました。

東急ハンズ京都店にて、学生企画「本をトレードする無料カフェ」を開催しました

本企画は、ビジュアルデザイン学科3年生の授業で「無料のカフェを作る」を課題として考案されました。回収ポストの設置や出張回収、SNSでの周知等で事前に収集した約2500冊のトレード用の本を、9月24日～10月2日までの期間、東急ハンズ京都店で実際にトレードし、多くの方にご好評いただきました。

大切な人に、ハガキで伝える「ピンクリボン活動」を実施しました

キャンパス内で、乳がん啓発の「ピンクリボン活動」を実施しました。ライフクリエイションコース3年生 井上俊介さんによる提案が株式会社ワコールとの産学連携プロジェクトとして実現したもので、乳がん発生率の低い大学生に対して、大切な人のことを思い、メッセージを添えて、乳がん検診をすすめるハガキを設置。参加を呼びかけました。

動物園で「稲刈り教室」？自然を通した人文学の学び

京都市動物園内にある「京都の森」で、人文学部の学生が、近隣の小学生に向けた「稲刈り教室」を実施。今年5月に同じ小学生らが植えた「古代米」を収穫してもらう体験教室です。本学では京都市動物園と提携を結び、人文学部の板倉ゼミが中心になって、この「京都の森」をはじめ、絶滅危惧種の淡水魚の保全活動などの運営もサポートしています。

イベント紹介

岡本清一記念講座第9回「日本と世界を考える」
山本義隆講演会 近代日本と自由
―科学と戦争をめぐって―

京都精華大学の初代学長である岡本清一の掲げた建学の理念を受け継ぎ、広く普及するために開催される「岡本清一記念講座」が、10月21日（金）に行われました。第9回目となる今回は、科学史家で東大全共闘議長を務めた山本義隆氏にご講演いただき、会場を埋めた500人近い人々が、山本氏の言葉に聞き入りました。

「大学は学問と教育と深い友情とを発見する場所である。学生の精神を凍りつかせるような官僚主義的な環境の大学では、友情を培うことはできない。学生を群衆の中のひとりとしてしか扱うことのできない巨大大学においては、学生の孤独からの脱出はきわめて困難である。そして学問的にまた人間的に魅力のない教授による教育は、無意味である」

京都精華大学初代学長である岡本清一が、1968年の開学当時に唱えたこの言葉を読み上げることから、講演会ははじまりました。開学当時、岡本がこのように宣言した背景には、多くの大学が「学問と教育と深い友情とを発見する場所」から離れていたことがあったと指摘。話を続けられました。

京都精華大学開学時は学生運動が最高潮に達していたころ。山本氏は、明治維新後、近代化した日本の歴史において、科学技術信仰に支えられた経済発展を求める点が1945年の敗戦を経てもなお変わることがなかったと話されました。「富国強兵・殖産興業」が戦後「国際競争・経済成長」という言葉に置き換わっただけの日本は、公害をはじめとする社会的災害を引き起こし、無理な発展のしわ寄せは弱者へと向けられます。1968年という年は、初めてそのことに疑問が提示された年であったと山本氏は述べました。しかしその後も、大きく変わることはなく、明治維新後より続く科学技術信仰を支えとした経済発展への前進は現在にまで続くことになります。そのしわ寄せは、弱者だけに留まらず、未来の世代へと広がっており、2011年におきた「東北地方太平洋沖地震」の影響で発生した「福島第一原子力発電所事故」を経験した今、そして経済成長持続の条件が失われつつある現在こそ、立ち止まって考えるときであると山本氏は訴えました。

講演の終盤、近代科学技術の発展が人間の自然に対する向き合い方を変えたとも指摘。それまで人間は、〝自分たちは自然の一部である〟との考え方をしていたものの、近代科学の発展から人間は自然の外にあって自然をコントロールできると考えるようになり、そのようなかで、核分裂というコントロールできないものをコントロールしようとしてしまったと述べました。科学技術信仰による経済発展のひずみがますます増大し、その様相が顕著になってきている現代を目の当たりにしている私たちにとって、山本氏のお話は、さまざまな示唆を与えられる講演会となりました。

○京都精華大学が主催するイベントを紹介。一般の方も聴講、参加が可能です。

デザインの可能性「空間論演習2」
デザインをめぐる対談や講演を行う。
【日時】
●金谷 勉（CEMENT PRODUCE DESIGN 代表取締役）× サノワタル（iroiro design代表／京都精華大学非常勤講師）
12月16日（金）
●中村竜治（建築家）
12月23日（金）
●新山直広（デザインディレクター／TSUGI代表）
2017年1月6日（金）
●大垣ガク（アートディレクター／アシタノシカク株式会社）
2017年1月13日（金）
●秋田道夫（プロダクトデザイナー）
2017年2月3日（金）
各回18時～
【場所】
京都精華大学 風光館3階 F-331
【問い合わせ先】
京都精華大学 デザイン学部 建築学科
E-mail architec@kyoto-seika.ac.jp

芸術学部客員教員 谷川 渥マンスリー・レクチャー「美術史を美学する」
谷川 渥（芸術学部 客員教員）によるマンスリー・レクチャーを行う。
【時】
12月20日（火）
18時～19時30分
【場所】
京都精華大学 清風館1階 C-103
【問い合わせ先】
京都精華大学 教務課
TEL 075-702-5244

すごいぞ！こわいぞ！谷ゆき子！
多数のバレエマンガを発表した谷ゆき子氏のミニ展示を開催。
【日時】
～2017年1月31日（火）
【場所】
京都国際マンガミュージアム 1階吹き抜けホール
【問い合わせ先】
京都国際マンガミュージアム
TEL 075-254-7414

LOVE♥りぼん♥FUROKU 250万乙女集合！りぼんのふろく展
りぼんの黎明期から現在までのふろく文化の変遷を追います。
【日時】
～2017年2月5日（日）
【場所】
京都国際マンガミュージアム 2階ギャラリー1・2・3
【問い合わせ先】
京都国際マンガミュージアム
TEL 075-254-7414

アセンブリーアワー講演会 中川五郎「時代は変わる ―ボブ・ディランの歌の世界」
大学創立時から続く公開トークイベント。
【日時】
12月15日（木）
16時20分～17時50分
【場所】
京都精華大学 友愛館 Agora
【問い合わせ先】
京都精華大学 社会連携センター
TEL 075-702-5263

精華生たちの今

毎年、さまざまなクリエイターが生まれ、飛び立っていく京都精華大学。
社会の第一線で活躍する卒業生と、その場所へ歩んでいる在学生を紹介します。

在学生

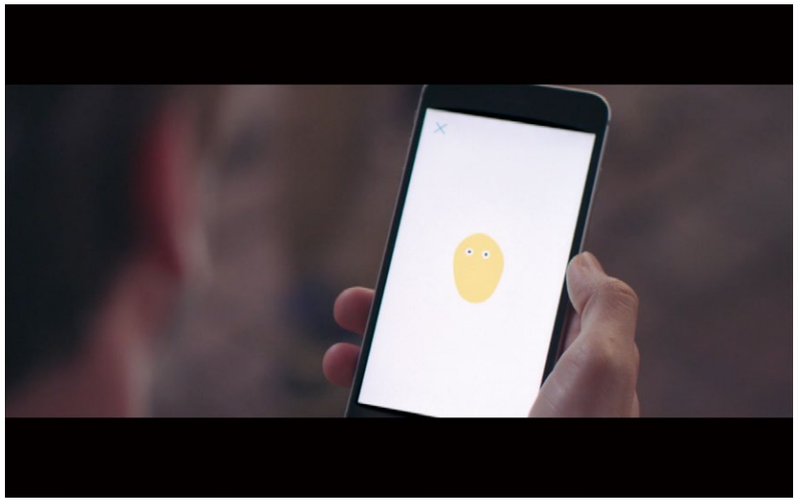
松田哲弥

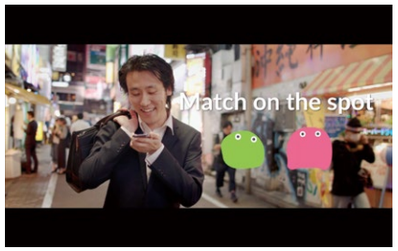
ミュージシャン、作曲家

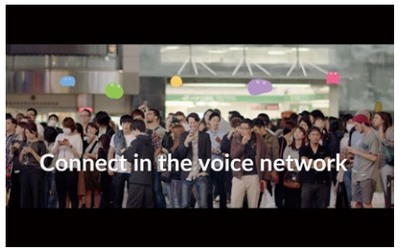
ポピュラーカルチャー学部
ポピュラーカルチャー学科音楽コース2年生

歩みはじめた在学生

幼少期より始めたプログラミングによる作曲活動で、
アプリへの楽曲提供などを行う松田さんです。







大学に入ってから制作した、龍谷大学の学生のプレゼンテーション動画（写真上）への楽曲は、音楽と国際協力という松田さんの共に興味のある分野での制作となった。その曲がきっかけとなり、2016年に制作したアプリ「baby」のコンペは最初効果音だけだったのが、紹介映像（写真左）の音楽も制作することになったとか。

―音楽に触れたきっかけを教えてください。

幼稚園の頃から父が聴く洋楽ロックやポップスを自然と耳にしていました。小学校に入って、ウェブゲームで遊んでいるうちに、自作するようになり、プログラムで音楽を作ることにハマったのが最初です。

―音楽を仕事にしようと思ったのはいつ頃ですか？

中学からアニメの影響でギターを初めたんですが、高校でバンドを組んでみて、自分は前に出るアーティストではなく、映像や舞台などの世界観を表現する音楽家になりたいんだと思うようになりました。

―今後の目標は？

今は来年のアメリカへの交換留学に期待を膨らませています。これまで独学で作曲をやってきたので、この機会に理論や楽譜について改めて英語で学ぶつもりです。将来的には憧れのディズニーの音楽に携わることが夢なので、それに近づけるよう、やれるだけのことをやりたいと思っています。自分のモットーは「死んでも悔いのないように」なので！

お仕事の依頼先
http://tm.774music.com

後藤靖香

画家

芸術学部造形学科洋画コース 2004年卒業

Photo by Akiko Nakano

活躍する卒業生

2010年に京都から広島へ移り住んだ後藤さんは、
子育てと両立しながら作品制作を行っています。

「覚悟のイロハ」（瀬戸内国際芸術祭2016出品作品）

大学4年の後半に、祖父や大祖父の戦争体験をモチーフに、戦闘行為以外のエピソードを墨のみで描いた作品を制作。ゼミの柏原えつとむ先生が褒めてくれたことがきっかけで、数々の公募へ出品したといいます。「これを最後にアーティストを辞めるつもりだった」という気迫で望んだトーキョーワンダーウォール公募２００６で入選。「飛躍となった」のは、２０１０年、大阪の国立国際美術館での展覧会『絵画の庭―ゼロ年代日本の地平から』への出品でした。作品の大きさ、テーマ性、タッチのおもしろさを評価されます。それがきっかけになって、ギャラリーでの取り扱いや国内の美術館や芸術祭への出品が続くように。近年では、その土地の歴史をリサーチし、個人のストーリーをモチーフにした作品など、作品の幅を広げ、精力的に活動を行っています。「戦争体験やその時代がモチーフになることが多いですが、人間という普遍的なテーマを常に考えています」と後藤さん。12月にはギャラリーフロールにて個展も開催されます。

マイブーム

民俗芸能を調べること。これは地元の管絃祭で、厳島神社の祭をモチーフに陸船が街を練り歩きます。

気分転換

昨年12月に生まれた娘。逆に制作が気分転換になることもあります。

欠かせないもの

旦那さんが作ってくれるごはん。特にカレーがお気に入りです。

道具

竹の棒にハケをつけた自作の筆で描いています。高見島の作品には墨汁5Lほど使用。

連絡先
yasuka510@hotmail.com

後藤靖香個展『必死のパッチ』
西陣織による軍需産業のエピソードを元にした新作も発表される。
場所：京都精華大学 ギャラリーフロール　期間：12月16日（金）～2017年1月21日（土）

ご支援くださるみなさまへ
～ご寄付のお願い～

様々な支援に関して、ご寄付のご協力をお願いしております。
「学生奨学金制度への支援」、「学生生活への支援」、「文化振興活動への支援」、「国際交流活動の支援」、「教育・研究設備整備事業への支援」より寄付使途を選んでいただき、みなさまのご意向にかなう運用をしています。お申し込みは、銀行窓口、もしくは、インターネット上でのクレジットカード決済にてご寄付いただけます。この寄付金は、文部科学省から「特定公益増進法人であることの証明書」の交付を受けており、税金控除の優遇措置を受けることができます。詳細につきましては寄付募集 Web サイト、リーフレットをご覧ください。

●寄付募集 Web サイト
www.kyoto-seika.ac.jp/donate

●お問い合わせ
京都精華大学企画室寄付募集担当
TEL 075-702-5201　FAX /075-702-5391
E-mail:kikaku@kyoto-seika.ac.jp

卒業生の方へ

●京都精華大学の情報は Facebook でもお知らせしています。
www.facebook.com/KyotoSeikaUniversity

●「木野通信」送付先住所の変更は、企画室・木野会事務局までご連絡ください。
E-mail：kinokai@kyoto-seika.ac.jp
FAX：075-702-5391

京都精華大学

人文学部
[総合人文学科]
文学専攻
歴史専攻
社会専攻

ポピュラーカルチャー学部
[ポピュラーカルチャー学科]
音楽コース
ファッションコース

芸術学部
[造形学科]
洋画コース
日本画コース
立体造形コース

[素材表現学科]
陶芸コース
テキスタイルコース

[メディア造形学科]
版画コース
映像コース

デザイン学部
[イラスト学科]
イラストコース

[ビジュアルデザイン学科]
グラフィックデザインコース
デジタルクリエイションコース

[プロダクトデザイン学科]
プロダクトコミュニケーションコース
ライフクリエイションコース

[建築学科]
建築コース

マンガ学部
[マンガ学科]
カートゥーンコース
ストーリーマンガコース
マンガプロデュースコース
ギャグマンガコース
キャラクターデザインコース

[アニメーション学科]
アニメーションコース

大学院
芸術研究科
デザイン研究科
マンガ研究科
人文学研究科

木 野 通 信
KINO PRESS.

木野通信　第68号
2016年12月9日 発行

京都精華大学 入試広報部 広報課
〒 606-8588 京都市左京区岩倉木野町137
TEL075-702-5197　www.kyoto-seika.ac.jp